文政十一年『花供養』
底本・白鹿
校異・麗沢大

花供養

（外題・題簽）

（表紙見返し）

花供養序

はなものいはざれども妖艶、人の眼をなぐさめ、喜香、香人の腸にしましむ。もとより虚霊不昧ひとたび感動し、たちまち玉吟金声とならざるはなし。これ人のこゝろみな花になりすまし、雨を愁ひ風をおそるゝたぐひにあらず。千歳不朽のはななり。時に

此花を揖て、ばせを翁のために
供養せらるゝ東山蒼羽客こそまた
よく花をおしむこゝろにして、この余
香あまねくあめが下にひろごりて、
能人の恨を消し、よく人の腸を澄しむ。
あゝ宜哉、花供養

文政戊子晩冬　　ちぬの浦　擔★(居偏に鳥)

三月十二日花供養会

魚飛て暮行花の木陰かな　　儁草

　替地ばたけの麻のむら生　　蒼虬

春中は旅商人の礼かねて　　榛堂

　やつたり門をふさぐ干物　　卦龍

糖釘を紙引裂てねぢておき　　月峰

<校異>麗沢大、上五「糖針を」。

　ことしの簗も是きりの音　　杜蓼

雁高うひとはな見せる朝の月　　夙也

　小菜うりも来ぬ綿の出盛り　　芳英

奥深に御茶屋の時計聞えけり　几乙
うるしのあしの伸る南風気　仲秀
客分のうちに娘をもらひきり　並隆
愛満講の当家つとむる　若雅
薪部屋のごみも掃こむ河戸口　義道
真桑瓜に腹のこはる休日　岱美
そろ〳〵とかすり出したる四蔵米　梅通
伊勢とつしまの御師の間違ふ　雪丸
宵月は棚捜しする手くらがり　貨僕

あまり近さにきもつぶす鹿　登里
露霜に血どめの薬施して　恬斎
出口のしれぬ大塩の町　兆三
ころ／＼とこかす初荷の古手館　十丈
朝まはりする春の肴屋　乙彦
鳶姪る声も何やらさわがしき　凡鳥
行場の道はいつもしめつく　松陰
地にあはぬ椴は檜にはへまけて　巵嵐
かぞへる鮎の手をすべる也　露頂

仰山な木津の子供のあばれやう　士明
　壁の好みも出来し萱ぶき　千之
仕舞ひ湯をひとくべさして這入らるゝ　喜楓
　土産の苞は手もさゝずおく　玉脂
事はじめまでは師走も麗に　半戈
　夜のあるうちに揚る黐縄　不十
辛洲への道のつきたる二の鳥居　湛露
　空が晴れば瘡うすらぐ　其暁
青蝿のしぶとく残るくれの月　言来

茎に似合はでちさき鶏頭　子竺
並酒もぐいと新酒になりにけり　以都美
ひとり左官の上手顔する　月敲
舟の来ぬときはきたなき浦通り　乙雅
日がな一日からす追ふ犬　丘斎
右一順

つやのなきものにはあかず山の花　大津　舒六
鳥の尾もぬれて霞や水の上　丶　九皐

汐はまや一軒前の朝がすみ　丶　菊住
つみたらぬ若菜を鶴に食れけり　丶　古猿
あがり／＼大川越るひばり哉　丶　宇洋
山高く見ゆる桜の入日かな　丶　南調
去年とひし日の思はれて遠桜　丶　蕙布
舟出して嬉しからずや春の風　丶　無隔
花と月其中にひくおぼろ哉　丶　米友
凍どけや脂のふき出る堂の椽　丶　東蒼
むしろ帆にかくるゝ島の桜かな　丶　春岑

おろそかに踏まじ花の木下道　丶　申斎
川を中に鶯ふたつさそひ啼　丶　閑斎
慈姑ほる手で詠居る桜かな　走井　斜道
船頭にしかられぬ梅の置所　坂本　于當
道造りすんだ所なり宵の花　カタ丶　其暁
酒ひとつ過して出たり夜の花　丶青樟更成章
花鳥の中に立けり老の杖　丶　禾郷
吹風の身にもさはらず花の山　丶　斗行
詠てはおらねども散るさくら哉　大ミゾ　一居

はる雨や志賀の畠のむかふ低　丶　麦洋
春毎に菫咲なりいほの壁　音羽　田美
舟がゝりせねど柳は見知りけり　万木　北馬
青柳や広袖着たる舟の者　南一　並翠
ちる椿花のおとゝはおもはれず　太田　乙鶴
咲だるみして咲にけり梅の花　丶　平沖
山里やかすみの底の朝ぼらけ　長ハマ　探草
長閑さや伊吹の雪の有ながら　丶　春芳
舟呼ぶや千鳥所もおぼろ月　彦根　素律

打杭のまばらに霞む川瀬哉　越川　神月
蛙からさきへ夜にいる山田哉　町屋　右渓
湯立すんで暮る間のあり落椿　〃　芋丈
花折てもどる声あり夜の道　辻村　星湖
世のあかを花にあづけて花見哉　〃　星嶺
賑やかなものや西日の山つゝじ　八マン　仙李
飯時は竈門へかげさす柳かな　〃　升明
ちる花に人の恋しき山路哉　浅小井　里鳥
我こゝろ笑ふな花に草鞋がけ　〃　一峰

浪先や数はをらねど飛乙鳥　日野　士明
七種のこだま初るや向ふ山　〃女　李夕
大声をしてかくるゝや岨の雉子　〃　一嘯
からたちのある土手なれど菫草　〃　和月
土手際にすべりし跡や梅の花　土山　虚白
湯あがりや余寒覚ゆる岨の家　〃　双鳧
うぐひすを十分にきく添乳哉　〃　石皷
渡らずに見るや小ばしの春の月　大野　月坡
はれ／＼し眼やにぬぐふて梅の花　イセ津　団釈

大藪の中より出ておぼろ月　　〃　麦村
武庫山のあらしのはてを汐干潟　　高座示　坐麓
花植る根を見に人のきそひけり　　松坂　普品
朝影や花も眠りの数にいる　　〃　翠川
田舎衆の橋まできたる柳かな　　山田　省吾
我声をちからに登る雲雀哉　　〃　杉堂
けふこそは農鐘聞てさくら狩　　〃　外松
ぬぎかへし草履も軽し春の月　　〃　卜二

^校異V麗沢大は、名前を「卜乙」とする。

七草やとなりを聞ばまた隣　　〃　桑和

山路来て里にとりつく柳かな　丶　淇悠
なが居して痩て帰るな小田の雁　丶　秋助
春の夜や藍瓶くさき浜通り　丶　在淵
はる雨や二度だきしたる鯲汁　丶　文外
望には果なきものよ花ざかり　丶　可笑
羽音して花にあぶなき暮の鳶　丶　叟眉
花守の垣手伝ふて戻りけり　丶　如芥
万歳の烏帽子さげ行山路哉　丶　蟻来
麓まで鳴ひろげたる蛙かな　丶　梧晋

大門をはゞかりもせで若菜売　　梅園
夕山のふか／〻＼となるさくらかな　　松扇
わか草や草臥ついた海の音　　鶴郊
鶯や二三日なれる臼のうへ　　九如
うぐひすや見えつ隠れつ梢まで　　葆光
草の戸や雛のうしろに鉤ともし　　丈李
鶯にうたがひかゝる初音かな　　一翠
花のかげふまじとのけば人の中　　昌作
くさめして鶯今朝も立せけり　　四渓

花の山なをおく深し人の声　逆川　南涯
大粒な雫ならぶや桃の枝　〃　滄洲
戸明ればいよ／＼梅の匂ひかな　〃　其友
佐保姫の笑るすがたかはつ桜　〃　五竹
山ざくらおくれし人に散にけり　イサハ　杜英
花盛日も入かねるけしき哉　弟国　一瓢
おもひ出したやうに椿の落る音　尾張ナゴヤ武貫
ふつと眼の付初るよりつく／＼　沓カケ　亘彦
落ざまに町を打こす雲雀哉　三河岡崎卓池

付木つく音や椿の窓ならび　足助　塞馬
留主がちの隣もちけり忘れ霜　東浦　楳老
見たほどは語りあふせぬ桜哉　宮ザキ　陽坡
きじ啼やどちらを見ても薄曇　〃　琴松
山もとや花と並びし軒柱　吉田　赤守
花見して広げてかへす莚哉　〃　蓬宇
膳椀のほこりかまはぬさくら哉　〃　常麿
朝の間は他の人も出ず花に鳥　遠江浜松　不十
はや／〃＼と満月出る焼野かな　武蔵八マン山青荷

杖にをりておどろく梅の莟哉　〃少年　未化
鶯のほそはぎのばす木の間哉　〃　太尓
はつきりと木の芽ほぐれて月寒し　〃　左流
山吹やひた／＼暮るかきの浪　〃　平二
鶯のはつ音の跡やおぼつかな　〃　栗支
それほどにはなれぬ中か花に風　〃　可布
春の山下りるに骨の折るなり　玉川　天由
岩はなの夫さへ蝶の寝る日哉　〃　宝水
山里や遅かりもせぬ梅の花　東都　何丸

はつ草やたゞちに明る山の体　　抱儀
もの／＼し梅の月夜に啼鴉　　応声
動かせばさのみ動かぬ桜かな　　友之
鶯の丸く啼出すあさ日哉　　禾葉
ねて居るか早蕨つむか岨の人　　素芯
あら磯にひとへの花の咲にけり　　上毛ミノワ　六莪
正月や畔みち越えし下駄の跡　　下毛真岡　米五
鶯の首途をなくかひがし山　　柳之
遠山の白きやたてや春の月　　来五

引きつたやうに啼やむ蛙かな　　ヽ　　みつを
芳野から世は曇るらし花の空　　ヽ一貫更　　梅麿
春の月黒ひはたしか百足山　　ヽ　　文藻
花に花かさねて高し吉野山　　下毛栃木　　道雄
春の雪いくら降ても梅の花　　ヒタチ真瀬　　滄水
雁立て水の淋しや春の池　　下館　　青寥
山里は子もたんとあり梅の花　　下総左原　　桐雨
梅ありてこそ夕ぐれも見られけり　　佐倉太田　　春雄
水のむで田にしになるな啼雀　　出羽アキタ　　仙風

是非なくも桜につなぐ小舟哉　、　国彦
行水や花よりさきに老の影　、　御風
ふたすぢの道あり寺と初桜　奥州　文骨
人中へ持出せばちるさくら哉　南部　卓堂
花ありて名のなき山もあはれ也　盛岡　湖柳
斧さいて霞にむかふ男かな　ヒダ高山　有美
静さや亀のうきたる春の雨　、　三友
焚ほどの松葉もありて花の陰　、　如松
晩鐘のこだまを返す柳かな　、　東有

戸口まで老をおくるやはつ蛙　丶　暁夢
春の月ひとあしよれば木間なる　信ノ藪原　韜光
うつらう日あればぞ花の美しき　林　里風
やくそくにつられて居ればちる桜　飯田　何頼
おぼろ月どこやらたらぬ草枕　甲斐市川　石郷
あんかんと水の流るゝつばき哉　越後新発田　了々
なの花や潮の音は夜にいりぬ　タザハ　芳兮
陽炎や牛ひき牛に牽れ行　加茂　養素
静さの夜を啼つのる蛙かな　丶　車十

初午やもらふて這入る寺の風呂　越中ト山　あふむ
雨だれになるまでまたず啼蛙　〃　雲布
雪折れのあと風情ある野梅哉　〃　凡丈
家鴨らのなくとき落る椿哉　〃　葦村
水のよいだけは馳走や山桜　フクノ　玉脂
はる風や鶏の肥たる寺まはり　〃　伯芝
花散て月は明るき木の間かな　高岡　麦車
浜町はみな早う寝てはるの月　能登ノトヘ　其種
　<校異>麗沢、作者名「春種」。
掃除してあるや余寒の山の裾　〃七尾　雪鴻

囉ひ人のかはりてをるや梅の花　丶ノトへ　尺花
曙ははるのものなり山科九郎　穴水　李之
一仕事すれば雨もつ柳かな　丶　石兄
柳よりはるかにひくき柳かな　七尾　楽斉
川船の白帆ならんで春の月　丶　ゆみ子
鶯に夜明のはやき野松かな　丶　竹塢
鴇ばかり往来するなり磯の花　加賀大聖寺　木雄
細ながれつくや雉子啼山の池　丶　丹嶺
おりたれば人の背戸なり花の山　丶　呼亭

春駒の拾ふて行や炭のをれ　金ザハ　年風
追つけば我子ではなし夕桜　〃　太甫
白魚の雲にも似たりあさ嵐　〃　一川
行燈も入らぬ夜にする桜かな　〃　白二
畑うちがきつと詠て山の雲　〃　固来
二枝と折てはくれぬ柳かな　〃　棹江
鶯にひとすぢ立や朝けぶり　〃　立介
きじ啼てふと宇治巡りする心　〃　商斉
空ちかう思ふや梅の咲あたり　〃　宇牧

汲水の片手ふさぐや桃の花　本吉　春輝
花の香や鎮りかへるまつ柏　越前丸岡　友甫
春の夜や鍬の音する垣隣　丹後ミヤヅ　万籟
沢山にふるや狩場の春の雪　〃　馬良
残る雪野にも小隅が出来にけり　〃　柳絮
大幣をひらめかしけり花の奥　丹波須知　俵瓜
野鴉とならんで雪の若菜摘　〃　蘆屋
水あびてからすも行や花のおく　〃　不凹
隣にはながき留主なり散椿　〃　千山

いづれ此道へもどらん朝霞　　〃　　魚舟
引ぬいた杭のあとあり春の月　　〃　　梧雪
鶯や障子明れば風のある　　イナバ鳥取　遜思
月花につかはれてさへ日は永し　　〃　　兌籟
山を焼けぶりのはしを帰る雁　　〃　　呉流
裸樹はありの侭なる余寒かな　　〃　　白試
海苔一把置て通りぬ関の前　　伯耆米子　草台
花の山おもへば梅は寒かりき　　出雲完道　春濤
咲にあるものをさくらのちるまでも　石見鳥越　尾山

花守にかりて戻るや小提灯　美作ツ山　澄月
川舟に三里寝にけり夕雲雀　ハリマ宇サ崎五芳
いらぬ日になりて薺の垣根かな　ソネ泥中更　樵風
静かなるものに添ふなり春の月　今市　琴洲
青柳やけさは誰にも逢ぬ門　魚サキ　節之
眼のおよぶだけは蝶飛ぶ日より哉　平ヅ　其暁
藪べりや舟に一ぱいおち椿　ワタセ　草々
ちる花や膝も崩さぬ仏達　三木　文郷
朝つばめ戸樋竹売にすれて行　丶　兀山

鶯や世間かまはぬ高いびき　西江井　楚江
鶏をかゝえてもどる霞みかな　津万井　六英
歌舞妓荷の関所越るや春の風　比延　古谷
糞とりの不断邪魔がる柳哉　ヒメヂ　曽夢
二階から出舟を向ふや朧月　〃　至明
冷やりと庭に風あり木蓮花　〃　為一
菜の花や道から戻す庵の傘　〃　周椎
下駄はいて来る人もあり夜の花　千本　奇峰
正月のひとかたづきや野梅咲　〃　琴止

藪の梅そのうしろにもみえにけり　備後フク山岱雨
朝の間は雲も桜の匂ひかな　〃　雪塢
しらぬ先ばかり都の花見かな　〃　陽里
ちる花にはたらき尽て眠る鳥　尾ノ道　鵞汀
鶯のこゝろになりて聞にけり　鞆　応雅
紙出して包て居るやつく／＼し　〃　蓬廬
花まへやあたりまかせに約束す　アキ広シマ鶴居
橋かけて銭とる陰の蛙かな　〃　田影
鶯の口から出たり朝がすみ　下ノ関　峰麿

〈校異〉麗沢大、「筑前下ノ関」。

寝よとつく鐘は罪なし春の雨　丶　素石
つくぼふて鶯聞や小溝ごし　秋月　塔然
春の夜や長柄堤は日傘さす　大宰府　莫図
明る夜をほのかに並ぶ若菜摘　吉木　万素
雨ちかく桜につくや温泉の匂ひ　福間　臥山
舟にたつ行灯床し春の月　小竹　立沙
木のもとや袖かき合す宵の花　ハカタ　松二
馬士の下駄の緒赤し梅の花　丶　南礎
芹ひけば跡にうきたる蛙かな　福ヲカ　士焉

万歳のもどりや海を夕詠　　〃　甫六
とま舟の料理聞ゆる柳かな　　〃　斗丈
はや起し鳥屋が門の春の月　　筑後クルメ　慶吾
梅が香に幾度ふみぬ門の砂　　〃　与山
むしろ帆も出るや霞のはづれより　　〃　千鶩
転び出て袖の玉子も春寒き　　〃　米汝
菜の花に明ればちかき湖水哉　　〃　幻化
唇の花にも乾く山路かな　　木屋瀬　香輔
炉塞ぎやはきやる塵に啼小鳥　　豊前小倉　木斎

鶯の遠音や傘の干るにほひ　秣　松風
吉野なり花に入人出る人　猪膝　紫川
暮る戸にもて来るさくら明り哉　ブンゴ日田　一樵
かう着てもこの正月の寒かな　肥前田代　梅調
折て来た足でくれけり初桜　大村　悠々
梅が香をはなれて高し朝の月　平戸　亀年
浜の家は裏のみ見えて猫の恋　長サキ　虎睡
蕗の薹ほろりとぬくき匂ひ哉　丶　雀堂
雁がねの一夜小高き別れ哉　丶　其映

言葉多き内義や花におくればせ　諫早　霞林
手をうてば鼠もきたり春の雨　〃　文洲
青柳のかげに溜るや水の泡　〃　史敬
扇をる手にさへはるを惜みけり　〃　棠雨
お乳の子も立並びけり柳陰　〃　素岡
よい子ども持て桜の軒端かな　〃　春里
かばかりの花もゆるさぬ荷ひ茶屋　天クサ　正焉
雪どけや其日／＼の遊びざま　ヒゴ　玉雪
人にかす馬は飼たし花の時　対馬　曙堂

爺婆々の嵯峨の戻りや花の杖　日向都ノ城　登鯉
青柳の下で米搗をとこかな　〃　黄龍
棚橋の水なき比をなく蛙　〃　柳月
大豆ほどになつて人行汐干哉　〃　碧水
折る音のひゞくや又も開く梅　サヌキ　岱年
木兎のねぐらかゆるや落椿　マル亀　夢蝶
香久山は古事おほし小松曳　〃　梅笠
江の家の住よく見ゆる柳哉　〃　雪涯
山寺の朝寝起すや傀儡師　〃　里楓

藤咲や水を施す家もある　　ヽ　　壷睡
さくらちる中に見出すや屋根の苔　　ヽ　　茂椎
馬士の銭よむうへや啼ひばり　　ヨシハラ　　杏堂
花のさく日とて朝から野風呂焚　　コンピラ　　螽羽
灰吹の音こゝろせようめに鳥　　ヽ　　寅石
鶯の初音のせけり旅日記　　ヽ　　月村
鯉はねる音より水は暖みけり　　ヒロタ　　一貫
万歳に逃て吼るや寺の犬　　スミヨシ　　桃陽
椿ちる下や子どものひと莚　　トキ　　流泉

鶯の梢に残すくもりかな　サカモト　幹岳
さしがねを覘て居れば飛燕　ウタヅ　南之
のどかさやさはれば落る樹の雫　ヲホミ　梅渓
風邪引もはやりもの也花の時　河内村　其岳
鶯に向て流すや杉丸太　〃　玉爛
春風や田に移りたる二の鳥井　阿波徳島　鸞巣
鶯や梢の雨を踏しめて　〃　茂陵
おき／＼にたばこもうまし雉子の声　〃　青柯
ちる花の中にも高き桜かな　〃　橘茶

家移りの粥たく空や帰る雁　　〃　　涼宇
寒きとは人の栄耀ぞ梅の花　　白地　　一秀
道／＼も手よけかねて花見かな　　淡路須本　露頂
梅の門人よりそうに通りけり　　〃　　始丘
居ることならぬ盛や岨の花　　南都　　悠鹿
はるの夜の夢の跡ひく霞かな　　〃　　雪下
新鍋の鉄気ぬけけり初桜　　〃　　暁求
しら魚や何ぞめでたき名もあらん　　〃　　耕六
行先のしれぬ道あり花の山　　〃　　雪化

うつくしう夜も明にけり花の塵　仝
海みゆるまで登りけり花の山　仝
植込は雨まだやまず飛ぶ小蝶　高野　辛夷
たゝき菜に俎やりぬ梅の花　〃　馨斎
鶯や丁度仕舞になる渡し　〃　閑那
夜の花馬にもひとつ灯のともる　紀伊田辺　陶斉
鶯や啼そやしても愛らしく　若山　南鳳
馬市の損も噺すや夕がすみ　イヅミ堺　擔★
（★居偏に鳥）
世の中のふところらしや花の中　〃　清風

青柳に引よせてある車かな　　花実
鶯にはやうつとしきはしら哉　　丶
馬の尿逃てふみ出す土筆かな　　摂津兵庫　如箭
田の道の送りむかひも睦月哉　　イタミ　太乙
連翹や塔から見えた家は是　　仝
夜ざくらや居りつぶした足の豆　　丶　　仝
　　草方

　　高きに登りて
見おろすや菊にもたてる夕烟　　公氷
　時雨に月のよく晴し秋　　草方

うそ寒に人足帳を受取て　西月
無腰で歩行むらの侍　氷
新池も沈鳧計りは来たらしき　方
熱湯でよべのあと仕舞する　月
下略

鍋ずみも蓋も流れて帰る雁　〃　一東
日も暈をめすや花見の真盛り　〃　鳴々
行処もなしに歩行や朧月　〃　秋助
春なれや家に帰りて雨のふる　ナニハ　西月

牛馬の大津を花のはじめ哉　　鵞雪
ちりし花一日づゝは塵ならず　　白楽
きさらぎや一人うれしき松の風　　蕗州
あつらへたやうに桜の庵かな　　庵女
川どめに宿とる不意の花見哉　　君齢
居残て花見る山の窪みかな　　松子
大さうに田螺居る田のさくら哉　　月桂
ゆるされて梅折こゝろやみにけり　　松隣
鶯やけさのたばこも行灯の火　　素明

行春や此ゆふぐれの気不性さ　肥大村在阪　有両
しんとして斧の音ある桜かな　ナニハ　素羅
居風呂や月もさし入花盛り　〃　世外
犬つれて桜尋る深山かな　〃　夏口
梅が香や月はいつもの汐がしら　〃　梅圃
建並ぶ蔵や霞んで山の月　〃　秋山
存外に垣のきびしき野梅哉　〃　蟻兄
昼からはながくおぼゆる柳かな　〃　一肖
鶯や来ときが能てみなが聞　〃　公氷

草の戸に花の香みちて雨ちかし　宇治　一路
深草や宵からふけておぼろ月　伏見　義雄
灯ともせば木ぶかくなりぬ山の花　洛　月峰

〈校異〉麗沢大、所書なし。

三条は旅の空なり朝がすみ　金菜
湖の魚みな浮にけり春の雨　貨僕
木母寺に是非ひとつ居る胡蝶哉　卦龍
土器のよきほし場なり梅柳　岱李
我馬のつらすりつける桜かな　蘿閑
追かけて爰まで来たり蝶胡蝶　可雄

一先づは花に戸をさす夕べ哉　若雅
見た事が啌にならうぞ散る桜　兆三
花鳥のながれや人の来ぬ朝日　鹿川
降までといふ間にかゝる花の雨　路鳥
そより／＼さかりを見せる桜かな　几乙
一日も哀れはしらず花の旅　自絲
渡るのも栄耀らしけれ春の水　およう
宿にして見れば小くらし花の中　乙雅
花に蓑約束のあるすがたかな　千賀雄

女

橋かけて去る僧あり花の頃　恩古
関こすや花かたげたて億せざる　李角
のどけしやそこらあたりが蟹の穴　金ヒラ在京　雨奥
人馴た鳥の居りけり春の山　言来
夜のうちの寒さみゆるや野の柳　以都美
窓だけの風はある也桃のはな　子竺
旅の夜は何にふるひて啼蛙　太老
若鮎や嵯峨の手紙の濡ながら　並隆
松風の吹広げるや春の水　義道

会釈してをらずなりけり垣の梅　喜楓
花ざかり夜明／＼の新しさ　月敲
いつの代に小宮が出来て梅の花　岱美
山高う木樵の唄ふ霞かな　一山
何となく夜はしづかなり月と梅　羅浮
鶯やきのふの枝へけふも来る　柄花
芽出しから床しや菫花持て　歌和
大藪にはさまる花のさかり哉　巵嵐
午時もはや過しか花に吹小風　芳英

朧夜や渡し見かけて九折　祖郷
去年買た畑に先つむ薺かな　且斎
鶯や人に言れぬ気草臥　凡鳥
うぐひすや遠慮会釈もなき隣　杜蓼
古道を見て居れば来る燕かな　長成
ものいふもひくき蚕の一間かな　蘇山
駕籠やろといふ声辻に霞けり　十丈
青柳のひとすぢ長し雪車の道　榛堂
見えながら埃曇りや春の水　世南

鳥の立枝の動くや夕がすみ　夙也
曇らねば花ともいはぬ在所哉　千崖
庵の花おそくて雨をのがれけり　蒼虬

二四ウ

歌仙一折

めざむるや枕の先の草の餅　蒼虬
晴行あとのあたゝかき雨　俵瓜
さし木する小溝続の泥汲て　千崖
背負ふて通る馬荷おさえる　榛堂

潮風呂のかげんくるはす暮の月　瓜
　あたら芒を捨ものにいふ　崖
茸狩に交る醍醐のまつり客　堂
　かくしだてしてちんばみらるゝ　瓜
内証であけてくやしき垣の錠　崖
　羽二重落のうすきさかやき　堂
行年の小栗語りに素湯呉て　瓜
　菎蒻踏の草鞋揃える　崖
銘々に夜舟上りの小風呂敷　堂

人噛犬の笈を引ずる　瓜

無造作に煙囲ひの鈩鞴小家　崖

山に幟をたてゝ拝ませ　堂

花の前絵産に月のきはつきて　瓜

歩行鵜ひとつにいそぐはる川　崖

二六ウ

裏表紙見返し

裏表紙